

## 2014年 がん専門薬剤師海外研修事業報告

京都大学医学部附属病院 薬剤部

祝 千佳子

Chikako Iwai

日本医療薬学会がん専門薬剤師海外研修事業により2014年5月29日～6月7日の期間、米国シカゴで開催された第50回米国臨床腫瘍学会(ASCO)年次総会参加およびミシガン大学病院で研修をさせていただいたので報告する。

### 1. ASCO 50<sup>th</sup> Annual Meeting (2014/5/30～6/3)

ASCOはがん領域の第Ⅲ相試験の結果が多く報告され標準治療が大きく変わりうる学会である。2014年は50周年という記念すべき年でもあり“Science & Society”というテーマで盛大に開催されミシガン湖畔にある世界最大のコンベンションセンターMcCormick Placeは5日間で3万人を超える参加者で活気にあふれていた。世界の第一線の医療者が結果に注目し熱い討論をかわす場面を肌で感じることができる非常に貴重な体験であった。最も注目される重要な口頭演題はPlenary Sessionで報告され3日目午後はメイン会場以外もすべて会場スクリーンはPlenary Session一色となる。今年には乳癌、前立腺癌及び大腸癌に関する4つの第Ⅲ相試験が発表された。そのうちの一つに世界中から8381名が参加したALTTTO試験の結果とし

てHER2陽性の早期乳癌患者に対し、トラスツマブ補助療法にラパチニブを追加しても転帰は改善しないことが報告された。先立って行われた小規模なNeoALTTO試験ではラパチニブとトラスツマブによる術前補助療法を実施し、病理学的な完全奏効の割合がトラスツマブ単独と比較して倍となったことから長期的な転帰改善が期待されたが、結果は4年無病生存率は86～88%の範囲であり治療群間で統計的有意差は認められなかった。長期的な治療効果の代理マーカーとして乳房における病理学的な完全奏効を指標とすることを再考する結果となり大きな話題となっていた。他に興味深かったのは肺がん領域で、第2世代EGFR TKIであるアファチニブはシスプラチン+ペメトレキセド、シスプラチン+ゲムシタビンとの比較試験で、Exon 19欠損変異(Del 19)とL858R M+の患者631人を対象として行われた全生存期間(OS)の解析で生存期間中央値(MST)がアファチニブ群27.3カ月、化学療法群24.3カ月( $P = 0.0374$ )とアファチニブ群が良好であった。またDel 19群ではMSTがアファチニブ群31.7カ月、化学療法群20.7カ月( $P = 0.0001$ )と大きな差を示した。これまで第1世代EGFR TKIsと化学

療法との比較試験ではOSに差を認めていないため、Del 19患者に対してアファチニブが重要な役割を果たすと期待される。患者教育や医療コスト、緩和領域の報告が増えていることも印象的で緩和領域ではENABLE IIIの結果から specific palliative care phone-based support programの有益性が示され、進行癌患者の介護者へ早期から緩和ケアサポートサービスを導入するほど介護者のQOLが高められることが示唆されていた。

## 2. ミシガン大学病院研修 (2014/6/4~6/5)

後半2日間はアナーバーに移動しミシガン大学病院での研修であった。8時~16時まで午前は臨床業務、午後は講義(貧血外来、治験、緩和ケア、臨床研究、がんセンター見学等)、ランチタイムディスカッションも含めプログラムが組まれていた。業務はテクニシャン、監査中心の薬剤師、臨床薬剤師に分業化され、専門課程と経験を積んだ専門薬剤師が臨床薬剤師として患者指導などを任されていた。血液腫瘍内科薬剤師に同行したが、7時台に患者面談を一通り済ませ回診時に病室前で患者の現在の病状、血液データ、治療方針等が討議される際、薬剤師は抗がん薬のレジメンや投与量、副作用等について面談で得た情報を含め発言していた。診療科長を中心に多職種で討議する形式で問題提起と学びが得られる生きた教育が回診現場でなされていた。2日目は婦人科外来化学療法室でのがん専門薬剤師の業務に同行した。スタッフ室では医師、がん専門看護師、ナースプラクティショナー、薬剤師の声がとびかい治療方針に関わる討議をしていた。採血結果待ち時間に医師より先に薬剤師が問診を行いポート留置時期であることも等も先導して説明し、内服薬の処方も担っていた。抗がん薬は薬剤師の最終チェック後に正式な処方として運用されていた。外来化学療法を行う予定患者への説明はナースプラクティショナーと共に1時間以上かけて行われていた。薬剤師主導で分厚い冊子を用いて治療薬や副作用や対処法について詳細に説明し、疑問に丁寧に回



写真1 2014年度海外派遣員(左より佐々木、熊澤、祝、内田)

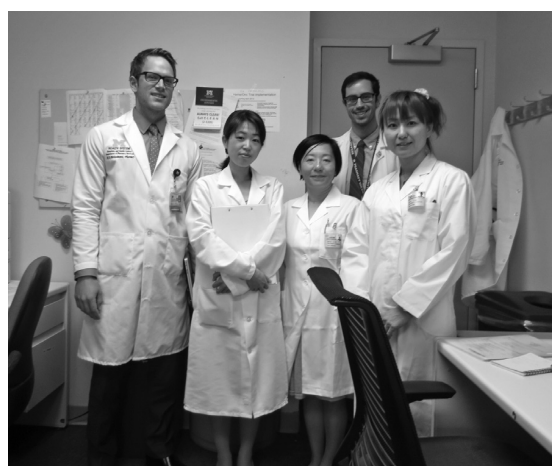


写真2 血液腫瘍内科担当薬剤師と



写真3 婦人科外来化学療法スタッフ室

答することで患者の不安な表情が途中からやわらぎ、笑顔で帰宅されたのが印象的であった。遺族へ医療スタッフ全員からのメッセージ郵送場面にも遭遇し、最先端の治療で多忙な中でグリーフケアが組み込まれていることに驚いた。外来治療センター開設以来継続しているとのことだ。臨床薬剤師が医療の中心で専門職としての立場を確立し、その専門性が非常に厚い信頼を受け協働して治療に介入していることを実感した。専門薬剤師に与えられた権限は医師に近い役割を担っており、日本でも薬剤師の権限が今後広がっていく予兆を感じるとともに、専門的知識のブラッシュアップが必要で大きな責任が課せられていると感じた。

### 3. おわりに

今回の海外研修で得た経験を日本の良さと融合させ、これからの薬剤師の発展と教育に還元していきたい。このような大変貴重な機会を与えていただいた日本医療薬学会の先生方、団長として支え指導して下さった今村知世先生、派遣メンバーの内田まや子先生、熊澤里美先生、佐々木寿子先生、ミシガン大学病院の先生方、快く送りだして下さった京都大学医学部附属病院薬剤部の松原和夫教授はじめ多くの先生方に心から深く感謝の意を表したい。